教育・文化スポーツ常任委員会資料２－１
令 和 ３ 年（２０２１年）６ 月 ９ 日
高校教育課魅力ある高校づくり推進室

第５回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

１　会議の日時等

開催日時　令和３年５月11日(火)14時00分～16時05分(県庁北新館5B会議室)
出席委員　原　清治　徳久恭子　坂口明徳　髙田　毅　樋口康之　稲葉芳子
　　権並裕子　中作佳正　上原重治　徳田　寿　中山郁英

◇これからの県立高等学校の在り方について

２　委員からの主な意見

■県立高校の役割/私学との関係

①	公私の定員については、生徒減少の時期を控え、公私で定員についての課題を共有し、共通の認識を持って対応していくことが必要ではないか。
②	私学はそれぞれの建学の精神のもとで学校経営をしており、生徒数の減少に合わせて公私で比率を決めて一律に定員を減じていくことは私学としては適切ではない。県立は教員の母数が多く、新規採用を減らしたり、定員を維持する学校への異動があったりと比較的調整が可能であり、従来どおり私学の定員に配慮して、県立高校全体の定員を考えていただければありがたい。
③	就学支援金による授業料実質無償化によって経済的な私学へのハードルは低くなり、さらに私学はかなり特色を出した学校運営をしているので、私学のニーズは増えていると感じる。
④	中学生は、私学であろうが県立高校であろうが、自分のニーズに合った学校を選ぶ。県立と私立の垣根はあまりないのではないか。
⑤	滋賀県の私学は、部活動や大学進学の目標が決まって専願で選ぶ生徒と、公立への希望がかなわない生徒の両方を受け入れている。県立と私学がお互いにどこまで請け負うのかという分担が必要ではないか。
⑥	公立高校も私立高校も、学校教育法第１条に規定されている学校であり、税金によって国の支援を受け、学習指導要領に基づいて教育しなければならないが、それでこれからの魅力ある高校づくりができるのか。学校に補助金を出すよりも、保護者にバウチャーのような形で教育にしか使えない仮想通貨を渡して、それを使って学校を選ぶようにしていくとよい。
⑦	会社の場合でも、インターンシップが非常に流行っている。オープンスクール等で、もっと中学生が高校に行きたいと思うような取組をすれば、公私の違いはあまり関係なくなるのではないか。
⑧	福井県は、県立高校の入試の時期をずらして私立と同じ時期に実施するような記事があった。滋賀県では、私立高校に留意して県立高校の募集定員を決めている。生徒の減少を県立高校の定員でカバーすることは分からなくはないが、もやもやしたところがあるという感想を持つ。
⑨	滋賀県のように、私学に一定配慮しながら人口減少地域の県立高校の募集定員を一方的に減らしていく、あるいは、公私の募集定員の比率を崩してしまうやり方がいいのかどうかについても、しっかり議論してほしい。公立と私立は、同じテーブルに着いて、きちっと募集定員について有機的な協議をする必要がある。

■学校規模に応じたメリット、デメリット

①	リモート教育を導入することで、学校の規模や立地の問題はフォローできるのではないか。企業においても、大企業は出せるお金が桁違いだが、桁違いに赤字を出して悪くなることもある。教員数が80名を超えるような学校は、業務を細かく分けないと運営できないだろうと思う。
②	愛知高校は小規模だが、これまでから地域共学という教育理念で、地域に根差した学校づくりが進められてきた。その結果、行事、ボランティア活動、開放講座、講師の派遣等で地域との連携が進められてきた。小規模校のデメリットの前に、その学校の持ち味や強みを発揮して、社会に開かれた教育課程を具現化していくことが魅力化につながるのではないか。
③	10 学級と２学級の規模の学校に勤務した実体験として、資料２－４のように大規模でも小規模でもメリット・デメリットはある。大規模な学校は、単純に人が多いだけで間違いなく活気・元気さが出る。一方で、大規模であっても、例えばバスケットボール部に70人も部員がいると、生徒の活動や要求がどれだけ満たされているのかといった課題もある。
④	リモート学習は有効だが、同じ空間、同じ場所に人が集まって活動することでしか学べないこともある。感覚的には、４学級から８学級くらいが妥当と思う。
⑤	特別支援学校は、大規模化が進む学校と小さな学校が二極化しているように思う。大規模になれば、施設・設備が手狭になるデメリットがあるものの、子どもたちの課題別の学習ができるなど、集団編成がやりやすいというメリットはある。高校では、進路別の学習等ができることがメリットだと思う。
⑥	資料２－４の学校規模によるメリット・デメリットは、人が集まることが前提の対面指導を基本として整理されたもの。将来的には、オンラインを活用することで、学校規模の問題は解消されるのではないか。
⑦	令和の日本型学校教育の構築を目指すという中央教育審議会の答申で、楽しいと思える授業がたくさんあるかどうかの調査結果によると、中学校よりも高校が低下しているとあった。学校規模に関係なく、子どもたちが学びが楽しいと意欲的に学んでいけることが最も重要ではないか。
⑧	小さな学校が好きな子どもがいれば、大きな学校の方がいいという子どももいる。そんな子どもたちのニーズに学校の規模が合っていくことが重要。ただ、小規模校は、地域の実態や需要等をしっかり考えて、魅力づくりをしていく必要があるだろう。

■将来に向けた議論の必要性

①	人口が減少しているという現実を受け入れ、対応策を考えていく必要がある。
②	中学生全員が公立高校に入れる定員が欲しいという意見もあるようだが、行きたい学校に生徒が集まり倍率の差が出る現実がある。倍率が1.0倍を超えた入試に合格した生徒は緊張感を持って入学しており、入学後の学習への取組意欲は高いと思う。1.0倍を超える学校づくりがしたいと思う。
③	1学級25人や30人くらいの少人数授業は、生徒にとって発言の機会が多くなり、教員側から見ても声掛け等の機会が増えるので、きめ細かで密度の濃い授業ができるのではないか。これは、大規模校でも同様。
④	小中学校は35人学級なので、高校も40人学級という枠を外して考えていく必要が出てきているのではないか。子どもの実態を見ていると、より丁寧にみてくれる学校を選ぶ子どもは増えてきている。
⑤	滋賀県は全県一区であり、生徒にとって自分自身に合う規模感と、先生方の手厚い教育の両方がマッチングすることが学校の魅力になるのではないか。地域によって、学校規模や学級規模は変わってもいいのではないか。
⑥	議論の際に、評価の軸に注意しないといけない。スケールメリットの話になると経済性が基準となるし、一方、地域の話になると人間性や地域社会の存続のことが軸となる。また、子どものこととなると偏差値や全人格的教育という話になる。ここが学校教育の難しいところだ。
⑦	奈良県も全県一区であり、進学校の方が大規模化しやすいということはある。滋賀県は、多様であることが大事という意見もあり、進学校は確保し、小規模校は新しい取組をしていることを打ち出すことも一つの在り方だと思う。
⑧	高校生が残ることは、地域の存続性、人口構成上の問題としても大事になってくるので、滋賀県の地域間格差を是正するという観点からも小規模校が残っていることは大事だと思う。
⑨	小規模校に関して言うと、少人数で進学対応もする専門性の高い教育や、職業的な学びの学校も置きつつ、地域性を保つような学校も置くという、いくつかのパターンに分けられると思うので、多様な滋賀県の学びをセッティングするのであれば、グルーピングした方がいいのではないか。
⑩	例えば、地元の占有率が高い高島市、長浜市、甲賀市にある県立高校の募集定員は今後どうなっていくのかシミュレーションして、その上でエリアや性格分けをするやり方はある。
⑪	京都府丹後地域の学舎制のように、地域のいくつかの高校について、勉強は各校で少人数授業を受け、部活動や学校行事は合同で取り組むという高校の在り方は、高校が地域の大学のような感じで魅力を感じる。
⑫	京都府の学舎制には、生徒をバスで移動させることなどコストや煩雑さの問題は残るが、それぞれの学校を必要な状況に応じて適宜混ぜるという発想はあり得るのではないか。どの学校、どの地域ということもあるが、モデル校を少し作って、実験的にやってみようという取組の可能性はあるのか。 → 来年度に向けて、魅力化のためのモデル的な事業ができないかと考えているが、今後の議論を踏まえながら考えていきたい。
⑬	資料２－４の学校規模の整理は10年前のものであり、今の状況は変わっている。人間関係も学校で作らなくても外でつくることが可能かもしれないし、部活動も指導者を外から呼ぶこともできる。高校がある前提で話をしているが、なぜ高校を設置するのか、滋賀の高校は何のためにあるのかから考えて議論する必要があるのではないか。

⑭	将来に向け、これまで論点整理してきた方向性についてモデル化して取り組むのもいいのではないか。
⑮	人口減少が進む市町の活性化に、どういうふうに高校教育の魅力づくりを連動させていくかを踏まえた上で、高校と地域との連携や、隣接する高校同士の連携、また、人口減少が進む市町の活性化に資する高校の魅力化等を、令和４年度以降のモデル校の視点に入れてほしい。
⑯	長浜市、高島市、甲賀市に所在する県立高校の学校規模のシミュレーションが分かる資料が欲しい。

■現行入学者選抜に関すること

①	入試の回数が多いため、中学校教員からすると雑務が多くてしんどい。子どもたちの視点からはチャンスが増えている。また、推薦選抜や特色選抜には様々な課題がある。定員割れ後の選抜も必要ないのではという意見も聞く。入学者選抜は、一次選抜と二次選抜だけにする等、スマートな形にした方がいいのではないか。
②	特色選抜の問題や内申書の評価は改善した方がよい。
③	高校が地域の大学のような位置づけになるのであれば、進学に特化した学科には難易度が高い入試問題を、それ以外の学科については基礎的な学力等を図る入試問題を用意した方がいいのではないか。
④	将来的に、子どもたちが人間的な幅を拡げていくためには、学校に多様な子どもたちが集い学ぶことは必要。小中学校に比べると、高校はその部分が弱い。私立高校は不登校の経験がある生徒や、悩みを抱えている生徒を受け入れるような幅がある。
⑤	将来的には、外国籍の子どもや課題を抱えた子どもたちを、どのように評価して受け入れていくのか考えていく必要があるのではないか。学校へ行かなくても、いろいろなところで学んでいる子どもは多いので、様々な角度から評価していくことも必要ではないか。
⑥	高校教育で筆算を教える必要があったり、会社に入社して筆算を教えたりすることもあり、入学者選抜よりも小学校段階から卒業資格があるかどうかの査定をしていく必要があると思う。
⑦	入口でチェックする入学者選抜制度よりも、出口を保障するという発想も重要だということは、この会議で何度も確認している。今後の入試改善協議会で議論していただければありがたい。
⑧	現状の学力を基軸にしたような入学者選抜から少し脱却し、かつ中学校の先生方の負担が増えないような方法を考えていただきたい。また、県立高校の魅力づくりにも資する入学者選抜になるよう、本検討委員会から出た意見を入試改善協議会に持ち込んでいただけたらありがたい。

■魅力発信、ＰＲの手法

①	各校が作成しているホームページやパンフレットは、作りに差がある。同じことが書かれていても表現の仕方で受け手の印象は変わる。意匠的な部分に予算をかけていただきたい。また、各校の動画配信も作りに差がある。高校の魅力は各校が発信するにしても、作成にあたっての人的サポート等の体制がないと、学校任せでは難しいところがあるのではないか。
②	この学校に入学すればこんなことができる、こんな生活ができるということが分かりやすい動画配信は、子どもたちにとって有益ではないか。
③	中学生やその保護者等、ターゲットを絞った情報・魅力発信の仕方は必要ではないか。各校の動画を拝見したが、安曇川高校の動画は面白いと感じた。
④	中学生が興味を引くパンフレットを調査して、その情報を作る側に提供するといいのではないか。また、高校生が動画を作成する場合も同様に、中学生受けする動画の例を知る機会を設けてあげたらいいのではないか。
⑤	市町が開催するイベントや施設等を利用することも、色々な角度からの魅力発信となる。積極的に市町の行政を活用していいただきたい。お互いウィンウィンとなるのではないか。
⑥	入学後のミスマッチを防ぐ観点で考えると、中学生が高校入学後の生活で不安を抱いていることや、知りたいこと等の側面も意識したものだと安心感が増す。また、例えば、小さな学校だからこそ、こういう手厚い指導を受けられますよといったアピールも、少数でもそういった学校を希望している子どもたちには有益ではないか。
⑦	中学生に届くのは SNS ではないか。例えば、インスタグラムや TikTok を活用するといいのではないか。部活動の中高交流や、高校の学園祭や授業等をリモートで体験することも、直接的な行動として大事ではないか。
⑧	高校が中学生を対象に未来塾的な活動をして、その交流から入学することを決めた生徒の入試は面接だけという制度があってもいいのではないか。